

国際バカロレアの普及で日本の教育が変わる

広島女学院大客員教授（IB調査研究室長）・リンデンホールスクール中高等学校校長

大迫弘和

国際バカロレア（以下、IB）は、これまで、海外からの帰国生や

日本に駐在する外国人子弟のための教育プログラムというイメージが強かった。

しかし、この度、政府が国内のIBの認定校を、今後5年以内に200校程度増やす方針を発表した。なぜ、今IBなのか、その本質とは何か、IB校以外の学校がIBから学ぶべきことはあるのか。

日本におけるIB教育の第一人者である大迫弘和客員教授に話を聞いた。

アカデミックな学力は 全人教育においては教育の一部

政府が国際バカロレア（以下、IB）の認定校を200校程度に増やす方針を掲げた背景には、IB普及を契機に日本の教育を変えたいという狙いがあります。IB教育には日本の教育に不足しているものが内包されており、導入が進めば日本の教育全体にもその波及効果が見込

めることに、文部科学省や多くの教育関係者が期待を寄せています。

IBの本質は「多文化に対する理解と尊敬を通じて、よりよく、より平和な世界の実現のために貢献する、探究心、知識、そして思いやりのある若者の育成」というミッション・ステートメントに集約され、全てのプログラムはその使命に基づいて組まれています。更に、使命を実現する具体的な人物像として、IB学習者像

国際バカロレアが なぜ今、注目されるのか

◎1968年、インターナショナル・スクールに通う高校生のためにスイス・ジュネーブで誕生したIB（ディプロマプログラム、DP）が、対象を広げ始めたのは90年代半ばだ。94年に中等教育に相当するMYP、97年に初等教育を担うPYPがスタートした。PYPとMYPは日本語による教育が可能であり、国内の私立校や国立校での導入が見られた。

2011年、「高校卒業時にIB資格を取得可能な、またはそれに準じた教育を行う学校を5年以内に200校程度へ増加させる」とする提言が政府のグローバル人材育成推進会議によって打ち出されたのを端緒に、IBの国内普及について産官学一体となった取り組みが始まった。

文部科学省と国際バカロレア機構は、これまで英語・フランス語・スペイン語のみで行われていたDPを一部日本語で行う「Dual Language DP, Japan」（略称日本語DP）の実施に関して13年3月に合意に達し、日本国内の一般の高校でIBを導入しやすいう環境が整った。また、国内の大学ではIB資格を取得した生徒を受け入れるための入試改革が進展しており、更なる広がりが見込まれている。



に「探究する人、知識のある人、考える人、コミュニケーションができる人、信念を持つ人、心を開く人、思いやりのある人、挑戦する人、パランスのとれた人、振り返りができる人」と示されています。「グローバル人材とはどういう人か」という議論がありますが、私はこの「IB学習者像」こそが、その答えになり得ると考えます。

そのような人材を育てるために、3〜12歳対象のPYP (Primary Years Programme)、11〜16歳対象のMYP (Middle Years Programme)、16〜19歳対象のDP (Diploma Programme)、高校卒業後に社会に出る子どものためのIBCCという4つの教育プログラムがあります。①使命、②使命を実現する人物像、③人物像を育てる教育プログラムの3つをきちんと

示しているのが、IBの特徴です。

そのうち、日本の教育でこれまで重視されてきたのは、③の教育プログラムでした。もちろん、学習指導要領には教育目標が示され、各校には教育理念があります。しかし、大学入試の影響もあり、ともしれば、入試対応力を身に付けることが目的化している場合が見受けられます。全人教育であるIBにおいて、アカデミックな力はもちろん大切ではありますが、それは教育の一部なのです。教科学習が教育の全てなのか、一部なのか、考え方に大きな違いがあります。

リベラルアーツ型の学びで豊かな教養を身に付ける

IBの教育の形は、リベラルアーツ型といえます。希望進路によってやらなくてもよい学習がある「文系コース」「理系コース」に分かれるという考え方はありません。DPでは、①言語と文学、②言語習得、③個人と社会、④科学、⑤数学、⑥芸術の6つの教科群を全て学び、ま

た、TOK・CAS・EEと呼ばれる必修を行った後、IB資格を得るための統一試験を受けます。

ある大学関係者が、DPの統一試験を東京大の個別学力試験のようだと評しましたが、確かにそのように非常に内容の深い試験になっています。しかし、IBの探究型概念学習を続けていけば、そのような試験にも十分対応できる力が付いていきます。

加えて、私は芸術が重要だと考えています。国際社会で活躍する場合、英語力だけが高ければよいわけではありません。英語は流暢でも会話に魅力を感じない人と、英語はたどたどしくても豊かな教養を持つ人とは、後者がはるかに高い評価を受けます。海外で働く人の中には、「仕事の話は出来るが、それ以外は全く話せず、文化や芸術の話には付いていけない」という人が少なくありません。海外では、仕事に関係のない文学や芸術の分野で専門家並みの教養を持つ人が大勢いて、そうした人がリーダーとして仕事をけん引しているのです。

私が10年間、校長を務めた大阪の千里国際学園でも、大半の生徒が高校3年生まで芸術を履修していました。いわゆる進学校ですが、生徒に履修の理由を聞くと、「人間として必要」と自然に返ってきます。IB的な文化が根付いているからでしょう。教養とは何かを考える上で、IBから学べることは少なくありません。

おおく・ひろかず ◎東京大文学部卒業。1987〜91年在英。千里国際学園中等部・高等部校長、同志社大学附属同志社国際学院初等部校長、Doshisha International School (Kyoto) 校長などを経て現職。主な著書に、『国際バカロレアを知るために』(水王舎、近刊)、『国際バカロレア入門―融合による教育イノベーション』(学芸みらい社)など。

*プロフィールは2014年3月時点のものです

IBは

概念化できる力を育てる

IBのもう1つの特徴は、概念化する力の育成です。私はIBの学習法を「探究型概念学習」と呼んでいます。ある国立大の元学長が、「海外の著名な研究者と話すと、知識量は自分の方が多いのに、彼らの語る言葉は極めて論理的で説得力がある」と言っていました。これは、知識の断片がきちんと整理され概念化されているから、発言に説得力が増すのだと考えられます。

いくら知識があっても、断片的に覚えているだけでは、論理的な話は出来ません。逆に、知識量は多くなくても、概念を形成するまでに知識が整理されていけば、人の心を動かすような議論が出来る。IBの教育を受けた人には、説得力をもって議論を引っ張る力があることを実感したと、元学長は話していました。

それに対して、これまでの日本の教育は、概念をつくるのではなく、事実を覚える学習が優先されていたのではないのでしょうか。いわば「暗記型事実学習」です。IBでは、調べれば分かる内容を暗記することは有効な学習方法ではないと考えられています。大切なのはむしろ調べ方で、そのスキルは徹底的に訓練します。

もちろん、IBでも覚えなければいけない内容はありますが、それを基にいかに概念形成できるかが重視されます。例えば、日本の高校

生は「遣唐使廃止の年」を問われれば、すぐに「894年」と答えられます。IBの生徒は、それが9世紀後半の出来事という知識はあっても「何年」といった質問には即答できないかもしれないませんが、政治的な背景や、そこから派生した文化、その時どの国でどのようなことが起き、それを踏まえて現代の国際関係についてどんなことが考えられるかという考察にはしっかりと力を発揮できるでしょう。

IBの教育を

特徴付ける探究活動

そうした概念形成を行う能力を高めるために、IBが重視するのが「探究」です。日本の高校でも、テーマを決めて研究論文を作成する探究学習を行う学校が増えています。優れた活動もありますが、その大半が学校の教育活動の一部でしかありません。IBでは、理念から教育方法までが見事に体系化されており、あらゆる活動において「探究」が求められています。

IBが大切にしているのは「学び方」、そして「教え方」なのです。私が90年代初めにIB認定校で指導していた時も、使う教材は『徒然草』や『舞姫』など、日本の国語教育でもおなじみのものでした。異なるのは、授業での教え方です。例えば、古文では、文法は暗記させるのではなく、文章の中でその法則性を生徒が発見していくようなことをしました。教材は同じ

でも、アプローチの仕方や方法論が、従来型の日本の教育と大きく違うのです。

IBの導入により、日本の教育にどのような波及効果が見込めるのか

現在、産官学が一体となってIBの普及・拡大に努めています。IB認定校200校の計画は、IB校においてIBプログラムを受けない高校生や200校以外の高校には、どのような波及効果があるのでしょうか。

1つは、IB認定校内部における広がりで、IBを学校全体で実施するのは、開校時にIBを前提にしてデザインされた学校でなければ難しいため、これから認定される学校は、校内の特定のクラスやコースでの実施になるはず。そこで気を付けたのが、IB担当の先生方が孤立しないようにすることです。IBのクラス・コースの教育と学校全体の教育との連関性がないと、どうしてもIB担当者が校内で孤立してしまうことが起こりがちです。そうならないよう、IBを担当しない先生方もIBのワークショップに参加することをお勧めします。ワークショップはカテゴリ1・2・3の3段階がありますが、カテゴリ1だけでも先生方全員が参加し、IBの理念や方法論を共有してほしいと思います。「こういう方法で教育が行われるのか」「自分のクラスでも取り入れられることはないか」と考えることで、校内におい

てIB的な教育手法が浸透し、教育活動がレベルアップするきっかけになるでしょう。

もう1つ考えなければいけないのが、IB認定校以外の学校への広がりです。今後、都道府県に3校、4校とIB認定校ができ、各校が成果を上げ始めれば、他校もそれを見て参考にしたいと思うようになるでしょう。今までの教育には何が足りなかったのか、今のままで子どもたちの将来を保証できるのかといったことを問いただす機会になるかもしれません。IBの普及によって、日本の教育のあり方を問い直すような議論が起ることを期待しています。

高校現場の教師からもIB導入を求める声

IBがどれだけ魅力的でも、大学入試が変わらなければ、IBの導入が難しいのは事実です。しかし、少しずつですが、IB資格を入試に活用する大学が現れ始めています。筑波大は15年度入試から全学で「国際バカロレア特別入試」を行い、東京大法学部、教養学部では、16年度入試で行う推薦入試においてIB資格を評価の対象とすることを表明しています。

一連の動きの背景には、IBの教育を受けた学生がいると、授業やゼミの雰囲気が変わるといふ期待があります。更に、大学のグローバル化の文脈の中でIBに注目する大学も出てきています。関西学院大は14年度入試でIBを含

む「グローバル入試」を始めるだけでなく、IB教員の養成コース設置の動きもあります。IBの教育を受けた学生が積極的に授業やゼミを引く姿を見て、IBの教育効果を確信しているからに他なりません。

学校現場を見ると、13年9月、札幌市が15年開校予定の中等教育学校でIBを導入する方針を発表しました。14年2月には、市がIBに関するフォーラムを実施し、会場は900人の聴衆で埋まりました。札幌市内の公立校では「総合的な学習の時間」の充実をテーマに勉強会を重ねていたところ、その過程で教員がIBを知り、まさに自分たちがやろうとしていたことであると気づき、導入を模索し始めたそうです。

国内外のIBのネットワークで指導力を磨いていく

IBには教科書はありませんが、使用は教師に任されています。また、教師用参考資料というものがあります。いわゆる指導書に当たるものはありません。指導のガイドラインには、おおよその学ぶ内容が示されているだけです。決まった教科書も指導書もない中で、教師自身が探究者になって授業を練り上げていきます。

IB認定校では、「IBコーディネーター」がプログラムの詳細をリードしていきます。特定の教科指導に関する専門的なアドバイスは難しいかもしれませんが、IBの指導に通じた経

験豊富な教師が任じられるので、各教科共通のスキルや考え方を学べるはずですが。

教科の専門性を高めるためには、「エデュケーター・ネットワーク」というネット上のつながりが役に立ちます。IB教師同士が国境を超えて助け合う場で、指導上の悩みや疑問を入力すると、世界中のIB教師からアイデアやコメント、体験が寄せられます。それをヒントにしながら指導力を磨いていくのも、1つの方法です。日本国内でもIB認定校が増えていけば、横の連携をとってノウハウを共有する体制を整えていけるとよいでしょう。

今後はIB認定校以外の高校においても、IB的な教育手法を取り入れたいと考える教師が増えるかもしれません。自分たちに出来るかと不安を抱いている先生もいますが、そんな先生に私は「出来るところからやればいい」とアドバイスしています。たとえ認定を受けなくても、学校のアイデンティティーを尊重しながら出来る形でIB的な教育を追求していけばよいのです。それによって生徒の力が引き出され、社会に出た後、高校で学んだことが生きている実感を得られれば、それで十分だと思います。

先生方にとって何よりも大切なのは、これからの子どもたちにどのような教育が必要かを考え、それを実践しようとする姿勢です。そのヒントがあるかもしれないという気持ちで、IBにアプローチしてみたいかがでしょうか。